

1. 目的

徹頭徹尾、音声言語としてのフランス語をへの習熟を図り、話題の文脈や場の状況に応じてスピーディに会話に加わり、聞き取りやすい発音と適切な表現を駆使して筋の通った意見を述べるような、自己表現能力、実践的な口語コミュニケーション能力を育成する。

2. 教材

購入すべき教科書や副教材はないが、IC レコーダー等、録音の道具を持参することを推奨する。暗誦用テキストの発音など、授業中の「音声情報」を手元に残す必要があるからだ。

なお、インテンシブ 3 については podcast で全ての教材をダウンロードできる。下記の URL から、インテンシブ 3 用のアイコンをドラッグ & ドロップして自分の i-Tunes に登録するだけで OK。ビデオ版と音声版の 2 種類がある。わからないことがあれば、この件に関しては國枝孝弘 (kunieda@sfc.keio.ac.jp) まで連絡のこと。インテンシブ 4 については、09 年春学期に制作する予定である。

ダウンロード用 URL: <http://frip.sfc.keio.ac.jp/#2>

3. 担当教員

インテンシブ 3 木曜 2 限: ジャメル・ラバイ

金曜 2 限: パトリス・ルロワ

インテンシブ 4 木曜 2 限: フローランス容子・シュードル

金曜 3 限: パトリス・ルロワ

4. 授業内容

インテンシブ 3 も、インテンシブ 4 も、毎回、どの教員が担当する授業の場合も、以下の 4 つのアクティビティをおこなう。同じ種類の活動を行っても、インテンシブ 3 と同 4 とで学習レベルが異なることはいうまでもない。

なお、授業中は基本的に、筆記用具の使用は許されない。履修者は、説明を聴いてノートを取りながら頭で理解していくというタイプの学習をするのではなく、身体的に言語運用を実践しながら音声と音声の組み立て方を身につけていくことになる。

- 1) 予め配布しておいたフランス語の文章(テキスト)を履修者一人ひとりが暗誦する。各学期中に、比較的平易なテキスト 6 つと、比較的難しいテキスト 6 つ、1 週間に 1 つずつで計 12 のテキストを扱う。各テキストは単純なフレーズから成り、いくつかのキーワードを含んでいる。履修者は毎回、暗誦できるように用意して授業に臨むとともに、そのテキストについて論拠のあるコメントを準備して来ることとなる(20 分余)。
- 2) DVD に録音されている CM を材料とする聞き取り、言い換え(ex. 現在形を過去形に転じる)、ヴァリエーション(ex. もとの CM の改変を想像し、条件法で語る)の演習(20 分余)。なお、おそらく授業時間外に 2 人 1 組で CM を作ることにし、それも評価対象とするだろう。
- 3) 口述描写の演習。毎週、4 つの対象をオーラルで描写する。1 学期 12 週間の授業で計 48 の対象を取り上げることとなる。この演習をとおして、さまざまな言い回しが身につく、ある程度長いフレーズを用いることにも慣れていく(20 分余)。
- 4) 「ドラマトロジー」(これは造語)と称し、スタニスラフスキー・システムと呼ばれる演技理論にもとづき、寸劇的なやり取りを実践する。ここでは、言語だけでなく、身体表現も大きくものを

言う。リアルな状況の中での自発的・即興的な口語コミュニケーションの演習(20 分余)。

5. **成績評価方法など**

ふだんの教室活動を評価する。学期末試験は行わない。但し、学期末に近づけば近づくほど、その学期中の積み上げが評価対象となる。たとえば、学期末には、授業で扱った計12のテキストをすべて、いつでも暗誦できることが求められる。口述描写についても同様である。